



真夏の 大災害が突き付けた課題 ボーダーを乗り越える人材に

千尋
Chihiro

自然は人間の想像や想定をたやすく超えてくる。自然災害による多くの尊い犠牲は、私たちに「同じ悲劇を二度と繰り返さない」ための重要な教訓を残した。被災地では、その記憶と教訓を風化させず、次の災害から命を守るための取組みが続けられている。

熊本¹の地が、またも震度七の激震に襲われた。七月二十八日午後四時二十七分頃、熊本県熊本地方を震源とするマグニチュード（M）七・一、震源の深さ一六²キロと推定される地震が発生。およそ一時間半後、イオンモール熊本で爆発事故が起きた。一〇年前の「平成二十八年

（二〇一六年）熊本地震」では避難拠点として被災者を守り、生活を支えた大型商業施設が、今回の「令和八年（二〇二六年）熊本地震」では激しく損壊し、地域と共存する役割を果たせなかった。

被災地では猛暑と断水が続き、被災者らは厳しい生活を強いられている。地下水が豊富な熊本県は普段から井戸水で生活している人が多い。地震で井戸が壊れたり、水に土砂が混じったりして使えない被害も起きているという。暑さのなかでの避難生活や復旧活動と、水の確保や供給の二つの問題が同時に顕在化した。

阪神・淡路大震災（一九九五年一月十七日）、東日本大震災（二〇一一年三月十一日）、熊本地震（二〇一六年四月十四日・十六日）、能登半島地震（二〇二四年一月一日）。震度七クラスの巨大地震を振り返ると、その多くが冬から春にかけての発災だった。

真夏に発生した大規模地震は少なく、今回の震災は「真夏の大災害」が最大の特徴だ。地震そのもののへの対応と、真夏の環境が生み出す複合的なリスクを同時に乗り越えなければならぬ。この「二重の重荷」が、災害対応を一層困難なものにしている。救助活動の継続、避難所の環境

整備、広域避難の促進、衛生・感染対策を並行して進める体制をどこまで速やかに構築できるか――。突き付けられた課題と残した教訓にしっかりと向き合っていきたい。

人だけを守れば済む時代ではない

今夏は列島各地で危険な暑さに見舞われた。気象庁は四月十七日に最高気温四〇度以上の日の名称を「酷暑日」と決定した。近年、記録的な高温が続いているために誕生した新しい用語で、一段上の暑さ対策が必要な時代になったとも言えよ

う。七月二十一日には、岐阜県・多治見の四〇・三度、次いで愛知県・豊田の四〇・一度、岐阜県・八幡の四〇・〇度となり、初の酷暑日を記録した。

都内で七月十四日に今年初の三六・六度を観測した。体温を超える暑さを記録するなど、熱中症のリスクが非常に高まった。羽田空港（東京都大田区）で十三日午後三時半頃、四本ある滑走路のうち、C滑走路の路面で縦横二〇センチ、深さ五センチほどの穴が見つかった。国土交通省が現場を詳しく調べたところ、周辺でも複数のひび割れを確認した。

路面が剥離したのは直射日光が当たる滑走路表面のコンクリート層だけだった。滑走路付近の暑さによつて路面のひび割れから入った水分が膨張し、舗装がもろくなったことが穴の発生原因とみられる。修復作業のためC滑走路は約二時間半にわたって閉鎖され、十三日の運航ダイヤが大幅に乱れた。国土省は十四日夜から十五日明け方にかけて

C滑走路を改めて閉鎖し、本格的な復旧工事を終えた。今後は滑走路の点検を強化するという。

猛暑に悲鳴を上げているのは、どうやら人間だけではないようだ。暮らしや経済を支えるインフラも猛暑のリスクにさらされている。社会を支える「足元」が揺らぐ時代。猛暑を乗り切る備えは、人だけを守れば済む時代ではなくなった。

「当たり前」とは何か深く考える

「水」は地球規模の課題であり、また日本各地域の課題でもある。近年の気候変動に伴い豪雨や豪雪、干ばつの被害など、水にかかわる問題が多く、世界的にも深刻になっている。国連の持続可能な開発目標（SDGs）のなかで、水は様々なゴールやターゲットに関連するテーマだ。水にかかわる問題の解決に向けて、世代を超えた取組みが必要となっている。

「水の日」の八月一日に都内でシンポジウム「水未来会議二〇二六」が開かれた。日本水フォーラム（竹村公太郎代表理事）が主催したイベントで、人材育成・啓発プログラム「ユース水フォーラム」の一環。水に関する動画を制作した高校生世代が作品を発表するとともに、水問題について意見を交わした。

動画は世界に発信するため、英語で三分にまとめられている。身近な生活での水の出来事、水に関する研究、地域の水に関するボランティア活動、水に関する国際交流活動など内容は自由。当日は、三高校・一高専の学生が登壇した。

学生たちは動画制作の前と後で、意識が大きく変わったという。アフリカのタンザニアで水問題に取り組む日本人に話を聞いた学生は「世界に目を向け調べるなかで、水の『ある・なし』ではなく、水の問題を自分事として捉え、どう付き合っていくかが大事だと気付いた」と話した。限りある水と向き合うタンザ

ニア人に対し、「水が豊富に使える日本人は、災害などで水の適量が変わった時の知恵を持っていない」とも指摘。「相手の当たり前を知って、持続的な支援や水循環の仕組みを考えていきたい」と未来を見据えていた。

多くの学生が「当たり前」とは何かについて深く考えたようだ。常識は国や地域によつて異なり、複数ある。あるコミュニティでは正しくても、違うコミュニティでは間違っていることもある。異なるものを各コミュニティが自身の常識と照らし合わせ、より良い方を選んでいく。その過程では摩擦や衝突も起こるだろう。学生たちの言葉や行動は、それ乗り越えるための何かを学び取ろうとしていた。ボーダーを乗り越える人材は今後ますます貴重な存在となる。日本だけでなく、世界を引っ張る人に育ってほしい。